

## 庾信の「辺塞詩」に表われた雲について

矢 嶋 美 都 子

### 序

中国の詩のジャンルに「辺塞詩」がある。北や西の果てにある国境附近の「辺城」や「辺塞」で征戦・行役・軍旅に苦辛する兵士の心情やその帰りを待つ妻の嘆きを詠じた作品をいう。これは（盛）唐頃多作されるようになったジャンルであるが、辺塞詩のさきがけのような作品は魏の時代に作られ始めており、もちろん庾信の生きた時代（五一三～五八二）にも作られていた。しかし庾信は正史が伝えるように、又代表作「哀江南賦」からも知られるように、侯景の乱による内乱体験者であり、故国喪失者であり、いわば敵地で囚われの宮廷詩人として後半生を送った人であるから、庾信の戦争に関する詩は所謂「辺塞詩」とは少し違っている。それは北朝の天子や諸王らの軍勢を讚美したり、出征を言祝いだり又同行したりしての作であって、つまり宮廷詩人という枠の中の作なのである。こういった作品は約十首（『庾子山集注』に収載されている作品総数約四七〇、その中詩・賦・樂府約二七〇篇）ある。数はそれほど多くないが、そこに描かれた「雲」は庾信以前の作品を通覧した目でみると、特異なあらわれ方をしていて新鮮な印象を与えるものである。これは杜甫が「春日憶季白」の中で、清新庾開府 と言った清新の一面を見る手ががりとも思わ

れ考察することにした。このテーマはかなり大きいので、本来なら六朝詩全体の中で取り扱うべきであるが、それは稿を改めて別に論ずることにする。今は戦争に関する作品にしぼって、その歴史的流れの中から庾信の雲の特異性、新鮮さを跡づけてみようと思う。

## 一 庾信の戦争に関する詩の雲

庾信の戦争に関する詩は約一〇首ありその中、雲のある句を含む詩は以下のごとくある。

① 「從駕觀講武」〔庾子山集〕卷三、以下収載書名省略、巻数と詩題のみを示す〕に

置陣横雲起。陣を置けば横雲起り

開營雁翼張。營を開けば雁翼張る

② 「奉報趙王出師在道賜詩」〔卷三〕に

雨歇殘虹斷。雨歇みて残虹断え

雲歸一雁征。雲歸りて一雁征く

③ 「和趙王送峽中軍」〔卷三・一作に和趙王送從軍〕に

山城對却月。山城は却月まがに對むかひ

岸陣抵平雲。岸陣は平雲あに抵あたる

④ 「奉和趙王途中韻」〔卷三〕に

度。雲。還。翊。軍。 雲度れば還た陣を翊け  
廻風即送師 風廻れば即ち師を送る

⑤ 「同盧記室從軍」(卷三・一作從軍行)

箭飛如疾雨 箭飛びて疾雨の如く  
城崩似壞雲 城崩れて壞雲に似たり

⑥ 「侍從徐國公殿下軍行」(卷三)に

陣後雲逾直 陣後の雲 逾よ直く  
兵深星転高 兵深の星 転た高し

⑦ 「奉和平鄴応詔」(卷四)に

陣雲千里散 陣雲千里に散じ  
黄河一代清 黄河一代に清む

⑧ 「燕歌行」(卷五)に

代北雲氣昼昏昏 代北の雲氣 昼に昏昏たり  
千里飛蓬無復根 千里の飛蓬 復た根無し

……中略……

妾驚甘泉足烽火 妾は甘泉に烽火の足るを驚き  
君訝漁陽少陣雲 君は漁陽に陣雲の少なきを訝る

以上の詩の①と⑦は『芸文類聚』巻五九武部・戦伐の項に、①は又『文苑英華』巻二九九軍旅・講閱の項に、②と③は同じく巻二九九征伐の項に、⑤は同じく巻一九九樂府の項（但し「従軍行」として）収録されている。④は『周書』巻四一王褒伝に

褒曾作燕歌行 妙尺関塞寒若之状 元帝及諸文士並和之（褒曾て燕歌行を作り、妙く関塞寒苦の状を尽す、元帝及び諸文士並に之に和す）

とあり、庾信も加わっていたとすれば在梁時代の作である。戦争に関する作品に雲を素材として配す傾向は梁代に増加しているが（詳しくは後述する）庾信のこれらの詩に見られる、特に横雲・平雲・陣後雲逾直といった詩の絵画的構成に重大な役割をもたせた雲の扱い方は、新鮮であり特異な手法と思われる。そこでこの新鮮さ特異性を検討するために従来の中作品中の雲の使われ方を三つに大別してみた。

- a、雲のように多い、はやい、高い等といった形容詞のように使われた雲
- b、雲そのものを描き、そこに様々な心情・事象を反映させた象徴的な雲
- c、絵画的効果を強調した雲

無論中国の詩に現われた雲は単純にこの三分類に納まるものではないが、一応の目安にはなろうと思われ、ここ視点を置いて以下論を進めることにする。

## 二 雲の形容詞的用法

先ず古い所から戦争に関する作品を見ると、『詩経』秦風・無衣、豳風・東山、小雅・采芣、小雅出車等があるが、いずれも雲は使われていない。戦死者を祭る歌とされる『楚辞』九歌・国殇に

旌蔽日兮敵若雲。 旌 日を蔽い 敵 雲の若し

矢交墜兮士爭先 矢 交もに墜ち 士 先を争う

とあって、敵兵が雲のように群がっている。と兵士の多いさまを形容するのに使われている。先の分類ではaに相当する用法であるが、これに類する発想は漢代に盛んであった。主に漢代の賦の中で、一々の例は引用しないが、建物の高さ、天子の恩沢、人や器物の多さ、山・島の靈妙さ、人・鳥・獸等のはやさ等の形容に使われ修辭が発展した用法である。今戦争に関する部分に限って見てゆくと、李陵の「答蘇武書」に

猛將如雲。 謀臣如雨（猛將は雲の如く、謀臣は雨の如し）

とある。司馬相如の「上林賦」では、天子が軍事訓練を兼ねた狩猟を行う時の兵士の様子を

離散別追 淫淫裔裔 綠陵流沢 雲布雨施 （離散して別れ追ひ、淫淫裔裔として、陵に縁り 沢に流れて、雲のごとく布き雨のごとく施す）

という。揚雄の「羽狩獵」は

車騎雲會 登降閭闔（車騎雲の如く会い、登降閭闔たり）

とあり、又「長楊賦」では

豪俊糜沸雲擾……迺命驃衛 紛沔沸涓 雲合電発（豪俊糜沸雲擾して……迺ち驃衛に命ず、紛溲沸涓として、雲のごとく合い電のごとく発す）

という。後漢の班固の「東都賦」では

於是聖王乃……赫然發憤 応若興雲（是に於いて聖武乃ち……赫然として憤りを発し、応ずること興雲の若し）

とあって天下の義兵が光武帝に応じて雲のようにわき起ったと使っている。魏の応瑒の「撰征賦」では

飛竜旗以雲耀（飛竜の旗以て雲のごとく耀き）

とあり、繁欽の「征天台山賦」では、

於是輶輶雲趨（是に於いて輶輶雲のごとく趨り）

とあり、晋の陸機の「弁亡論」では

千是大邦之衆 雲翔電発（是に干いて大邦の衆、雲のごとく翔け電のごとく発す）

とあり、潘岳の「閔中詩」では

素甲日曜 素甲 日のごとく曜き

玄幕雲起 玄幕 雲のごとく起る。

とあり左思の「魏都賦」では曹操の征伐の様子を描くの

雲撤叛換（叛換を雲のごとく撤らし）

と使っている。

これ以後はポツポツと散見するばかりになるが、雲を様々な形容に使うaの用法は、漢代の賦の中で増加変化し、それが戦争に関する作品でも軍勢の様子を描く際の一つの伝統的な表現法に定着していたのが窺われる。しかし庾信は先に引用した八例の詩で、雲をそのようには使っていない。雲そのものを出しているのである。そこで次に雲を描

き出している例を検討してみる。

### 三 象徴としての雲

雲が雲として描き出されている例は、五言詩の原点とされる「古詩一九首」をはじめとして古くからある（古詩一九首の製作年代及び作者名については諸説があるが、今は漢代の読み人知らずの作としておく）。古詩一九首の其一に、

浮雲蔽白日 浮雲 白日を蔽い

遊子不顧反 遊子 顧反せず

とあり、李善の注に拠れば

浮雲蔽白日以喻邪佞之毀忠良（浮雲白日を蔽いは以て邪佞の忠良を毀るそしを喩える）  
とあって、この浮雲は邪佞の臣の譬えに使われている。又其五には、

西北有高楼 西北に高楼有り

上与浮雲齐 上は浮雲と齐し

とあって、李周翰の注に

西北乾地 君位也 高楼言居高位也 浮雲言言高也（西北は乾の地、君の位なり。高楼は高位に居るを言うなり、浮雲と齐しは高きを言うなり）

とあって、高さをあらわすものとして使われている。作者が確かな古い所では、漢の高祖の「大風歌」に

大風起兮雲飛揚。大風起りて雲飛揚す

とある。この句全体を秦末の乱の譬えとする説と、大風を劉邦、雲を群雄とする説とあるが、いずれかにしても雲そのものを描き出しているも単なる写景ではなくて譬え・象徴として使っているのである。こういったbに相当する用法もずっと後世まで使われて伝統的・常套的な手法となる訳だが、戦争に関する詩に雲そのものが描き出されたのは何時頃からなのか見るために、ここで戦争に関する詩の流れを概略しておく。

そもそも戦争に関する詩というのは、先に少し触れた『詩経』『楚辭』の各篇以後では、『芸文類聚』巻五九武部・戦伐が詩の項の最初に後漢の崔駰の「安封侯詩」を引いていることから窺えるように（賦の項でも崔駰の「大將軍西征賦」を最初に置いている）比較的新しい詩なのである。そして作られる時期も偏りがある。大雑把にいえば魏の時代にいわば辺塞詩のさきがけのような作品がかなり作られ（武帝の「苦寒行」、文帝の「至広陵於馬上作」「黎陽作三首」へ四言）、同題の五言一首、明帝の「苦寒行」、曹植の「白馬篇」「雜詩其二」、王粲の「從軍詩五首」、左延年の「從軍行」、繆襲の「魏・鼓吹曲一二曲」等がある。晋・宋・齊と減少し、梁の時代に急増しているのである。ただ梁朝で多作されたのは詩よりも楽府の領域に於いてである。『樂府詩集』の採録基準には、若干の問題があるが、『樂府詩集』を一覧すると梁人の作がぐっと増えているのである。例えば「白馬篇」（『樂府詩集』卷六三雜曲歌辭）を見

る。

樂府解題に

……皆言辺塞征戰之事（……皆辺塞征戰の事を言う）



とあって、作者は、魏の曹植、宋の袁淑、鮑照、斉の孔稚珪（二首）、梁の沈約、王僧孺、徐悱である。又「從軍行」  
 『樂府詩集』卷三三和歌辭）は

樂府解題に

從軍行皆軍旅苦辛之辭（從軍行は皆軍旅苦辛の辭）

とあって、作者は、魏の左延年（『樂府広題』に収載）、王粲五首（A『全漢三国南北朝詩』及びB『漢魏六朝一百三家集』、『文選』等は詩としている）、晋の陸機、宗の顔延年、梁の簡文帝二首、元帝（Aは和王僧弁從軍と題し、Bは詩の項に置いている）、沈約、戴嵩、吳均、江淹二首（A及びB共に古意報袁功曹、雜体詩・李都尉從軍と題す）、蕭子顯 劉孝義（餞）、張正見二首、庾信（A及びB共に同盧記室從軍と題す）、王褒（文学史では北周の人とされるが梁朝から移った人である）、と梁人の作が急増しているのが分かる。

これは一つには詠物詩の盛行と関係があると推察されるが、テーマが決っている樂府は作詩の恰好な対象であったのだろう。又諸王子達のサロンで互いの才能を競うにも適した材料だったと思われる。従って樂府の中には、その題名から梁人が、テーマを辺塞・征戦・行役等に変えてしまったものもある。例えば「隴西行」『樂府詩集』卷三七和歌辭）の古辭は、もてなし上手の賢妻の讚歌であるが、梁人は、樂府解題に

若梁簡文隴西戰地 但言辛苦征戰 佳人怨思而已（梁簡文の隴西戰地の若きは、但だ辛苦征戰、佳人の怨思を言うのみ）

とあるように、隴西（今の甘肅省の南東の地）という詩題から内容を変えている。作者は晋の陸機、宋の謝靈運、謝惠連、梁簡文帝三首、庾肩吾である。「隴西行」は一名「歩出夏門行」ともいわれ、謝惠連までの作品はむしろ老壯

風の内容を持ち征戦辛苦とは無関係である。「燕歌行」〔樂府詩集〕卷三(相和歌辭)も燕(今の河北・熱河・遼寧省一帶)という北方の地名から梁人が内容を変えた例である。樂府解題に

言時序遷換 行役不歸 婦人怨曠無所訴也(時序遷換し、行役歸らず、婦人の怨曠しく訴える所無きを言う)

とあり作者は、魏の文帝二首、明帝、晋の陸機、宋の謝靈運二首、梁元帝、蕭子顯、庾信、王褒である。魏の文帝の作は婦人の立場から怨思を述べるのに主眼があり、明帝・陸機・謝靈運の作は、時序遷換を主体に婦人の怨を述べており、梁人の作は辺塞・征戦の辛苦といった事に力点が置かれ、婦人の怨思や時序遷換などは殆ど見当らなくなっている。更に梁人が新たに創造したものもある。例えば「驄馬驅」〔樂府詩集〕卷二(四横吹曲)は、解説に

一曰驄馬驅皆言閑塞征役之事(一に曰う、驄馬驅は皆閑塞征役の事を言う)

とあり、作者は梁元帝、劉孝威、徐陵、江総である。

以上見たように戦争に関する作品は梁代に急増しており、又それにつれて雲の出現度も高くなっているのである。因みに魏の時代の先の作品群に於いて、雲それ自体が描き出される例は皆無である。

では、こういった流れの中で、雲が姿を見せるのは何時頃からかといえ、晋の陸機の「苦寒行」が最初と思われる。軍役で北の果てに來た兵士の目に映じた風景として

陰雲興敵側 陰雲 敵側に興り

悲風鳴樹端 悲風 樹端に鳴る

とある。この雲は陰雲つまりくもった暗い雲で、兵士の不安や苦しさ、或は戦地の不気味さを象徴するものである。これに類する用例は、宋の鮑照の「白馬篇」に

薄暮塞雲起

飛沙被遠松 飛沙 遠松を被う

とあり、もの寂しい夕暮時国境附近の砦に雲が起った。暮時の雲であるから暗い雲である。又宋の呉邁遠の「胡笳曲」に、

日当故郷没 日は当に故郷に没せんとし

遙見浮雲陰 遙かに浮雲の陰を見る

とあり、梁の江淹の「古意報袁功曹」(一作に従軍行)に

従軍出隴北 従軍して隴北を出で

長望陰山雲 長望すれば山雲陰る

とあり、梁の虞羲の「詠霍將軍北伐」には、

飛狐白日晚 飛狐 白日晚れ

瀚海愁陰生 瀚海 愁陰生ず

とあり梁の呉均の「戰城南」(一作に胡無人行)に

陌上何諠諠 陌上 何ぞ諠諠たる

匈奴困塞垣 匈奴 塞垣を囲む

黑雲蔽趙樹 黑雲 趙樹を蔽し

黃塵埋隴垠 黃塵 隴垠を埋む

とあり、梁の徐悱の「白馬篇」に

日没塞雲起 日没して塞雲起り

風悲胡地寒 風悲しくして胡地寒し

とある（圈点の句は鮑照の「白馬篇」を踏まえている）。

こういった暗いくもった雲があれば、その反対の使い方をした雲もある。辺塞の不気味さや、不安を除き、士気を鼓舞する景気づけのための場合の詩で、宋の文帝の「北伐」に、

不覩南雲陰 南雲の陰を覩ず

但見胡塵起 但だ胡塵の起るを見る

とある。又北齊の祖珽の「従北征」は

祁山斂霧霧 祁山 霧霧斂まり

瀚海息波瀾 瀚海 波瀾息む

……中略……

方繫单干頸 方に单干の頸を繫ぎ

歌舞入長安 歌舞して長安に入らん

と結ぶ勇ましい詩になっている。又梁の呉均の「戦城南」（一作に失題）は

天山已半出 天山 已に半ば出で

竜城無片雲 竜城に片雲も無し

漢世平如此 漢世平かなること此の如し

何用李將軍 何ぞ用いん李將軍を

とあり、又梁の劉遵の「度関山」に

隴樹寒色落 隴樹に寒色落ち

塞雲朝欲開 塞雲朝に開かれんと欲す

とあり、又陳の沈炯（本来は梁人である）の「從駕送軍」では

雲開万里徹 雲開いて万里徹り

日麗百川明 日麗しくして百川明らかなり

といい、前途が明るい気分を盛り上げている。

こういった例から、戦争に関する詩に於いて現われる雲は一つの典型として晴れたり陰ったりすることで辺塞の不気味さ、殺伐たる雰囲気、兵士の不安・辛苦を象徴する型があると分かる。庾信の⑧「燕歌行」の代北雲気昏昏：君訝漁陽少陣雲の句と、⑦「奉和平鄴応詔」の陣雲千里散の句はこのパターンを踏襲したものである。更に⑧「燕歌行」の代北雲気昏昏の句は、江淹の「恨賦」に王昭君が匈奴に嫁ぐ時の情景を

隴雁少飛 代雲寡色（隴雁飛ぶこと少なく、代雲色寡し）

と言っているのを意識してしよう。又⑦陣雲千里散の句については、基本的には雲が晴れたり陰ったりすることで戦争に関する気分を象徴するというパターンを踏まえているが、陣雲を使った所に新しい詩境が感じられる。というのは陣雲は、『史記』卷二七天官書に（『漢書』卷二六天文志及び『晋書』卷一二天文に同様の記事があり、『漢書』は陳雲にして

いる)

陣雲如立垣(陣雲は垣を立てたるが如し)

とあり、垣根を立てかけたような雲で、更に『史記』の記事を見ると杼雲、軸雲、杓雲等が続ぎ、

諸此雲見 以五色合占 而沢搏密 其見動人 乃有占 兵必起 合闢其直(諸々の此の雲見われば、五色を以て合わせ占い、沢・搏・密を而うする。其れ見わられて人を動ずれば、乃ち占有り、兵必ず起る、合闢えばそれ直なり)

とあり、兵乱の起る兆の雲の一つである。つまり先に見た雲は、雲の自然現象の変化をとらえてそこに抽象的な心情を反映させたものであって、その雲自体に意味は無かったが、陣雲は兵乱の兆という意味を持つ雲なのである。庾信に先行する陣雲の使用例は、梁の何遜の長安の美少年の男伊達を詠じた「学古」其一(一作に長安少年行)に

陣雲横塞起 陣雲塞に横たわりて起り

赤日下城円 赤日城に下りて円なり

とあり、魏の曹植の「白馬篇」の変形に近い作品となっている。

この他に雲が表現された例には、雲の動きに注目した型がある。晋の張協の「雜詩」其八に

流波恋旧浦 流波に旧浦を恋い

行雲思故山 行雲に故山を思う

とあり、これは軍役に従う土地で故郷を思う兵士の気持の反映とみられる。宋の鮑照の「擬行路難」其一四に

朔風蕭条白雲飛 朔風蕭条として白雲飛び

胡笳哀急辺寒寒 胡笳哀しみ急に辺寒寒し

とあって、漢武帝の「秋風辞」の

秋風起兮白雲飛 秋風起りて白雲飛ぶ

を意識した句であり、若い時から軍役で辺境において白髪頭の今まだ故郷に帰れない。このままここで果てるのか、という征怨を象徴している。梁の沈約の「従軍行」には、

江颺鳴暈嶼 江颺暈嶼に鳴り

流雲照層阿 流雲層阿を照らす

とあって、軍役に赴く途中の凄しい光景を描写している。この雲の動きに注目した型に庾信の②「奉報趙王出師在道賜詩」の雨歇残虹断雲。帰。一雁。征の句も入ろう。ただ庾信のこの詩の場合は、親しかった趙王が蜀へ軍勢を率いて行くのを見送る者の心情を強調する句になっている。つまり、雲。帰。という表現は宋の孝武帝の「望月」に

思因往物深 思いは往物に因りて深まり

悲以帰雲盈 悲しみは帰雲を以て盈つ

とあり、帰ってゆく雲は悲しみを盈たすものであり、雁。征。というのは、宋の謝惠連の「燕歌行」に

飛霜被野雁南征 飛霜野を被りて雁南に征き

念君客遊驕思盈 君の客遊を念えば驕思盈つ

とあり、雁が行くのは見る者に友人の旅を思わせ旅愁をいっばいにするものであり、更に雲の中を一羽で飛ぶ雁というのは、宋の謝惠連の「雪賦」に

对庭鷗之双舞 瞻雲雁之孤飛……馳遙思於千里 願接手而同歸（庭鷗の双舞に対し、雲雁の孤飛を瞻る……遙かなる思いを千里に馳せ、手を接えて同に帰らんことを願う）

とあり、手を接えて一緒に帰りたいと願わすものである。庾信の②雲帰一雁征の句は趙王の軍勢の勇ましい様子を述べた後に、雨も止んだし、雲も切れたという軍旅の幸先がよい気分を盛り上げるために挿入した句であるが、先の典型のように晴れたり陰ったりとせず、雲帰とした所に作者の心情が強く反映され、一味違った趣きになっているのである。以上が戦争に関する詩に現われたbの雲の使われ方である。次にcの用法を見る。

#### 四 絵画的効果をあらわす雲

cの雲の用法は、aとbの型から更に絵画的効果を加え強調した用法である。型としては晋の陸機の「從軍行」に

胡馬如雲屯 胡馬 雲の屯まれるが如く

越旗亦星羅 越旗 亦た星のごとく羅く

とあるのが最初で、胡馬の群がる様子を雲が屯っているようだと言うのであるが、これはそれほど積極的に雲の形状を描写した句とは思われない。cの用法は戦争に関する作品にはあまり見られず庾信の作に比較的多いものである。

例えば庾信の③「同盧記室從軍」の

箭飛如疾雨 箭飛びて疾雨の如く

城崩似壞雲 城崩れて壞雲に似たり



の句にその典型が見られる。城壁が崩れてその様子は壞雲即ちみだれた雲の形に似ているという意味である。これは a の用法の、雲でもって宮殿の高さ奥深さをあらわす型を、雲と宮殿との関係を踏まえつつ具体的な形状を示すという型に発展させたものである。この発想のはじめは宋の鮑照で「蕪城賦」に

是以板築雉堞之殷……轟似長雲（是を以て板築雉堞の殷……轟なるは長雲に似たり）

とあり、宮殿のそろうて平らな轟なる様子をたなびく雲に似ていると、長雲という雲で示している。鮑照は又城闕そのものを雲にみだてて「代結客少年場行」で

九塗平若水 九塗の平なるは水の若く

双闕使雲浮 双闕は雲の浮かぶに似たり

と言っている。これを踏まえて城壁と雲の関係を定着させたのが梁の簡文帝で「登城北望」詩で

一水斜開岸 一水斜めに岸を開き

双城遙共雲 双城遙かに雲を共にす

と言い、又「隴西行」には

沙飛朝似幕 沙飛んで朝に幕に似て

雲起夜疑城 雲起りて夜、城を疑う

とある。又恐らく簡文帝と同時か少し先に作ったと思われる庾肩吾の「隴西行」には、

草合前迷路 草合いて前は迷路

雲濃後暗城 雲濃くして後は暗き城

とある。庾信の城崩似壞雲の句は、これらを意識しつつ（庾信は在梁時代、父親庾肩吾と梁の簡文帝のサロンで「徐庾体」なる文体の担い手として活躍した人である）壞雲という雲で城壁が崩れる様子を具体的に示した訳である。ただ壞雲という熟さない言葉を使った所に、新しみを出すと同時に何か含みがあるように思われるのだが、『晋書』卷一二天文志に

營頭 有雲如壞山墮 所謂營頭星 所墮 其下覆軍 流血千里—中略—氣如繫牛……如壞屋……此皆為敗軍之氣

（營頭、雲有りて壞山の墮つるが如し、所謂營頭の星なり、墮つる所、其の下軍を覆し、流血千里—中略—氣の繫れし牛の如き……壞れし屋の如き……此れ皆敗軍の氣を為す）

とある。この記事を見ると、壞雲は敵方の運命的な敗北、散々な負けぶりをも象徴しているのではないだろうか。

cの雲の使い方でも更に絵画的効果を出したのが、庾信の③「奉和趙王峽中軍」の

山城对却月 山城 却月なまらに對比

岸陣抵平雲 岸陣 平雲に抵る

の句である。圈点の句は、江中から岸の兵陣を見ると、その様子は平らかに一面をおおう雲に相当する、という意味である。兵陣ののべ広がった平らかな様を雲で表わすのは斉の孔稚珪の「白馬篇」に

驥子踟且鳴 驥子 踟り且つ鳴き

鉄陣与雲平 鉄陣 雲と与に平らかなり

とあるのが最初である。そして半月と城との対の組み合わせは、庾信とほぼ一緒に居いた友人の王褒の「從軍行」に

平雲如陣色 平雲 陣色の如く

半月類城形 半月 城形に類す

とあり、これと似ているのが、やはり在梁時代から庾信と親しかつた徐陵の句で、「出自薊北門行」に

天雲如地陣 天雲 地陣の如く

漢月帶胡秋 漢月 胡秋を帯ぶ

とある。王褒、徐陵、庾信の三人は当時を代表する詩人であり且つ年齢も近く交友のあつた間柄であるから互いに影響しあつたと思われるが、平雲の語を、詩の場面を平らにつまり横に区切る美的効果のもとに用いたのは庾信である。例えば庾信は、「周太子太保步陸逞神道碑」(卷一三)で平雲を

直河穿趙 直河 趙を穿ち

平雲臨代 平雲 代に臨む

と使っており、まっすぐな河、平らかな雲と、縦と横の線を出した幾何学模様の如き構図に仕立てている。③の山城対却月、岸陣抵平雲の対句も却月(半月)の曲線と平雲の横線の組み合わせという見方ができよう。庾信の⑥「待從徐国公殿下軍行」の

陣後雲逾直 陣後の雲 逾よ直く

兵深星転高 兵深の星 転た高し

の句もこれに類する。陣後の雲というのは先に三の項で見た兵乱の起る兆の陣雲即ち垣を立てたような雲を想定していると思われるが、それがますます直(直は壘に通ず)、平らかでそろっており、と横の線を強調し、高い所の点として兵深の星が対になっている。点と横線の構図といえよう。この変形は庾信の「周兗州刺史広饒公宇文文公神道碑」

(卷一四)に見られる。

直雲横塞 直雲 塞に横たわり

長星渡河 長星 河を渡る

とあり、垂直に切り立った雲が塞に横に広がり、そこに長星即ち流れ星が河を渡るという斜めの線を出した構図である。

こういった雲の使い方こそが庾信の「雲」の特異性、新鮮さを示すものと思われる。

戦争を題材にする作品即ち「辺塞詩」は、遠く『詩経』に源を發する大きな詩の流れである。庾信が生きた時代は、特に青年期はそのうねりが非常に高まった時代であった。庾信はそういった時代の影響をもろに受けて育ち、それは後半生、北朝で戦争に関する作品を作る時、庾信の基底部を支える素養となっていたはずである。だが庾信はそのうねりに流されることなくその中から特自の詩風を編み出した。新鮮な印象を与える「雲」の描写に於いてである。庾信の描き出した雲は、以上見て来た雲の使われ方の主流をなすa bの型を踏襲しつつもcの型、つまり雲そのものの形状に注目し、それを美的効果のもとに用いた所に特徴がある。平雲・直雲・横雲・雲逾直等といった雲の形に詩の場面を幾何学模様のように構成する美しさを見出したのである。この庾信の美意識・手法は隋初唐の詩人に影響を与え更に盛唐初期の王維に強く及んでいると思われるが、それについては稿を改めて述べる。